

「社会詠」論議の行方

2006年11月、青磁社ホームページ上の「週刊時評」（大辻隆弘と吉川宏志が一週間交代で執筆）において、大辻が小高賢を批判したことから論争が始まり、これらを受けて、2007年2月、青磁社がシンポジウム「いま、社会詠は」を開催した。私は、WEB上の論争を途中から覗き始めたのだが、9月には、シンポジウムの記録集も刊行され、経緯がたどれる。

小高賢は「ふたたび社会詠について」（『かりん』2006年11月）において、岡野弘彦『バグダッド燃ゆ』の次のような作品をあげて、「自分の戦争体験を重ね合わせて、現代に悲劇をうたいあげた岡野作品に共感、同感することは多いが、しかし、どう考えても、対象や主題に対しての感慨や視線は、外部からのものである」と述べた。さらに「岡野にかぎらず、現代の社会詠は、外部に立たざるをえない。立たなければ歌えないことも事実なのである。誠実であればあるほど、そうになってしまう。その難しさをいっているのである」と続けた。

- ・ 地に深くひそみ戦ふ タリバンの少年兵を われは蔑みせず
- ・ 国敗れて 身をゆだねたるアメリカに いつまでも添ひて 世を狭めゆく

さらに、「爆撃のテレビニュースに驚かず蜘蛛におどろく朝の家族は（小島ゆかり）」などをあげ、「爆撃に驚かず、蜘蛛の出現に騒ぐ家族。どこかおかしいのではないかと自省している。誠実な作品だ。しかしここでも、気になる。その先がないのだ」、「巧緻なゆえに、あるいはうまくできているために、意外にひびいてこない。そのアポリアが私たちの前にある」とした。さらに若い世代の林和清、松村正直の作品と次の二首をあげて、「一体、社会と自分との関係をどう考えているのだろうか。危機感がゼロのように見えてしまう」と記し、社会や世界に対する「視点」と「認識」の重要性を指摘した。

- ・ おそらくは電子メールでくるだろう二〇一〇年春の赤紙 加藤治郎『環状線のモンスター』
- ・ NO WAR とさけぶ人々過ぎゆけりそれさえアメリカを模倣して 吉川宏志『海雨』

これに対して、大辻隆弘が、小高のいう「認識の正しさ」と歌のよしあしは別次元で、社会詠とても、あるのは「いい歌と、ダメな歌だけだ」と反論し、吉川宏志は「自分より若い世代に対しては“危機感がゼロ”と決めつけてしまう」のでは対話は生まれないと、批判した。進む論争の中、歌や論の丹念な「読み」を説く一方、指摘された自らの不用意な要約、性急な論理展開等には簡単に謝ってしまう弱気も見せた。

シンポジウムでは、双方の言い分がかなり鮮明になったと思う。しかし、正直言って、私は、大辻の発言には大きな危惧を抱かざるを得なかった。①「短歌は何を歌うかが問題じゃないと僕は思う、基本は。斎藤茂吉の歌もたしかに典型的だと思うけど、あの言語芸術としての歌の響きというのは、開戦の歌にしる、それはそれは豊かだと思いますよ」（七五頁）、小高が、土屋文明の「大東亜戦争詔勅を拝して」と敗戦直後の「新日本建設」の一首を例に、その短絡の危うさを指摘するのに対して、②「つまり人間はこうやって変わっちゃうんでよ。日本人はやっぱり愚かなわけ。でも、愚かならおろかなままのものとしてあらわれるのが歌であって、その愚かさを批判して、主張が一貫していないじゃないか、と批判するのは、歌の本質を間違っているんじゃないか」（七八頁）とも述べ、斎藤史が全歌集への収録時に戦時下の歌を変更したことについて③「それを変えさせたのは誰だと。それは全歌集を出した昭和52年時点の歌壇における、いまの言葉で言ったら左よりの進歩主義的思想ではないかと」（八五頁）という。

表現者としての責任と自負を放棄するような、一種の「開き直り」のルーツは、彼の「師」の岡井隆あたりにあるのかもしれない。（『ポトナム』2008年1月号所収）